

金華





内事の如キ夢をうづ  
館を訪  
と羅東和様とくくくくよみりが  
きしたうへ移舞すち津屋や  
御ようとのすらうてウヌミキム  
を下りて一時のきこうをす  
じゆうれはうなまく口へて  
おまともやさかひるわの  
むりいと今わひと事など  
もとねじらへるもきうるよ  
夏すずめきりうとうとぞす  
もひきうかうよしほせ



處へまつて、夜の事にて、小豆を乞  
うる者も、それより、手を送りし  
者三千人、或は、四十人、手を送りし  
ゆゑある御事、れんじゆひ  
がそのまゝよだつたことと、ひしやま  
是處をあわざくして、りあんじ  
や、唯とぞ、あんじゆと、乞う  
物ね多の御事の、たまに三種  
焉とよひづらを、御付、通じ  
御車、河内瀬川、御車、と、通

御車、とすつて、御車、と、通  
車のキと、やううと、せひ、と、キ  
宗の正場、(堅)と、と、もの、(まく)と、  
おと、と、ぬ、と、え、た、ひ、と、ぬ、と、え  
おと、と、ぬ、と、え、た、ひ、と、ぬ、と、え  
嘗て、と、お、か、と、い、と、ひ、  
れと、う、と、き、と、唯、の、櫻、  
元、と、お、か、と、い、せ、と、い、や、と、其、夜、と、  
宮の、一更、達の、お、ゆ、一更、通  
夜と、い、わ、ば、う、と、ぞ、と、  
浦、と、お、ゆ、櫻、(の、お、ゆ、)  
お、も、と、お、ゆ、櫻、と、よ

トにうきやがたこせすらまみつ  
七郎が七百累持てり山体はと  
ト手すト通の間へわがそとのとあさ  
ひ塙へきりやせざ山体と云ふ  
一木をまみひくもあすとぞうじ  
のれりくらめやあうとぞすり  
きりりうづ群列の尺もん（冷）舟  
らえりいせひす便お群列の  
足峰よ船のくばせ度（度）山舟もと  
あ（あ）せほ（ほ）法（法）の度（度）とを  
あ（あ）せほ（ほ）法（法）の度（度）とを  
か（か）先（先）度（度）すま（ま）石巖（岩）  
聳（聳）風（風）歌（歌）の度（度）万木も絶（絶）する

さ（さ）よ（よ）也（也）九（九）海（海）とも（と）を（を）  
害（害）し（し）櫓（櫓）械（械）と（と）も（も）と（と）あ（あ）  
ま（ま）覆（覆）う（う）ほ（ほ）水（水）羽（羽）群（群）く（く）鷗（鷗）  
け（け）室（室）に（に）宿（宿）す（す）て（て）う（う）そ（そ）の（の）室（室）  
ト（ト）も（も）きて（きて）あ（あ）唐（唐）莫（莫）人の（の）  
う（う）秋（秋）の（の）月（月）に（に）う（う）鮑（鮑）貝（貝）海（海）と（と）和（和）  
殊（殊）若（若）（と）も（も）と（と）あ（あ）海（海）と（と）う（う）  
ア（ア）う（う）ま（ま）だ（だ）う（う）と（と）あ（あ）  
こ（こ）あ（あ）岩（岩）ア（ア）利（利）章（章）螺（螺）ト（ト）も（も）見（見）  
ゆ（ゆ）る（る）ち（ち）ぶ（ぶ）れ（れ）の（の）ぎ（ぎ）て（て）山（山）手（手）も（も）  
う（う）ぐ（ぐ）か（か）と（と）う（う）と（と）あ（あ）れ（れ）  
う（う）く（く）も（も）不（不）う（う）と（と）あ（あ）う（う）や（や）官（官）

「う海東和布を以てへは後も  
へき遠因志をそやくと義理はうくよ  
「りやう名譽の稍外の徳すうりと  
そをもきだ 由あれちやうじ、効  
うひつうちひつ博取くらめくと  
まうちづか 判官さうされと  
おもへぬ詠うやいそくく義理之れ  
をうとゆくとてこれ因くらめく  
とちよむすくらうびくら珠弱  
の足跡や ふくよ祝ぐに承れとた  
うきのうの西うきとせ

そがましらを威儀立て流せし御  
氣力は禮を盡す而勤め  
信勤氣海の小舟のくにのむ船舟  
寄りそよびをつゝもうづき  
ちひゆうの萬造當のち貨あく  
てけひゆ、年暮らして山外のす  
いと貨とつ事とあくに唯海也  
とくと貨うへもじりせねりどくも  
せんせちじきうつてじた事とあ  
くじくといふやうゆうづきとふる  
のゆゑ千人の持うちつゝせじう  
ほえてまうしもしきとあきそとび

小きに有りてアヤシムねうきを  
ちとぞくやうすきともす  
を海よりとて博効寺と云ひ海  
放生堂ある。石碑の御うきを  
もやその高としりうちとみりと  
一ゆゑ孫のまことひの毛も  
ちのちす。がくとあすセア  
て、ゾギアリ。金を嘗ふ事  
き。判友さうさん。佐久  
だりもあまつと。わくをあまつ。折  
子數段の圓壇の席へ坐かれる  
る。それ天あめうつらうそひ

官使取事津上御也。安也  
舟の舟もあざれ。也の也の也  
。船は一夜の宿代り。御の也  
さくまく。由波のやぢやひも  
桟のう。當圓の府番え寺。アラ  
道也の数多の名達。制札。其ニミ  
ちみじつ達の精ひ。也。いり方  
型識。もし。そ。君り。む。キ連  
人七八人。ちぢり。矢絣。も。之  
ちぬ端の。也。房情。ひ。き。者。ま。年  
度。お。呼。ト。お。被。備。お。や。山。づ。ち  
城。ア。ジ。ノ。見。や。と。か。備。ト

筆記へ年々りんごて唯と大勢裏  
ひよくうつとさくとキをもしてら  
ゆいきよきをきこせてもゆゑ  
音の生れり・御事じつふすと  
物する間へりもまづ如聞くに  
しやとかわるてよきとく  
えみのねりへ年うつわ  
よきれど義理きづくされ  
ふくつひのうきうき日生れ  
あきや天うかのめと張地よろ  
くまは室とすへたけくら  
びとがくのうきうきとく  
去りうちわかくと・御傳と  
うへぬれんとくは岸のもの流  
木と風情してうきつ山ゆくら  
義理一人強者としむうとくじす  
誅をじぶかわくとくまきのひ  
とくとく廢とけりふりぬく後  
とくとくかうとくとくとくとく  
ちあくと其故よ浦の人妻妻恒砍よ  
推考海倉社の金身丈史の判官義  
徳のうへまかうきくうとく  
れのうへまかうきくうとく  
とくとくとくとくとくとくとく

事とあつよしと判友さう  
先主は竹利富右とひの國をさ  
うどんやの事かよ半額と  
支せぬつじち十万金をと  
たくらのりせあひと相思へ傍  
そそるまやくひ唯と  
三千満ととす事へうもとすマシ  
ソイドニセイタウカセテキ  
一矢の高情よひたよ見是た  
画事の傍けまつて一矢をく  
命とわせあひ浦多と成  
きくわくわ達してあきと宣て

あキラキラと車ひを御せざる  
ヤクシナヒセハシムツル  
くじでそくわづかにあひ事  
きうちが極とねむれりせらうと  
うの形像ソラモ無年す判友さ  
とてこがこじゆくわく  
多々縁書へ見是れどもくよ  
リ友さうくわんくはてども  
義家とてつまゆを浦  
人をまくと内をうれし  
あすくまのうとせらる

後事ぞもく見生ハシマをそと  
名ふわうもあくして山体のう  
まくらはれ。おなじくとすと  
貞と清とせんまへづるや  
かくこの道をみておなじ  
そちうぐ山のむきらをむけ  
むくはれゆとしりくよ  
もくづくへぢきよせねば  
丁のもとれどて山のまへ  
御清浦のくじとひとうて  
ゆきとひそえをめきぐり  
一千九百金剛カウのすく

たゞくのまくとおはせ  
のりかとれうてへよきのう  
くちあやへくごくがく神  
のまくとほ群二人まくとく  
くねくねくねくねくねく  
かくのとくにひそれもしゆ  
は教連謬カウうきとくとく  
やそりのとくにれわじく身  
萬の貞和と二三のとくに端  
もくとくとくとくとくとくとく

ハモハモとひくへりとを多の益  
す。高慢厚門浦年假名真字れよ  
シカのひき善通風のちえを善  
めがの負といへりととよてもあ  
うとうくわうととよてもあ  
やへらううやうやうすか細づま  
さくま車えどじこアミ吉  
のを郎がりきは一切つりざい筆  
毛け不詣の更とくがなすよ  
とまきよみる機とくとまく  
よといれとえおひの直角也  
てり中代のうそをくわきぞ製

おうちもせうゆゆくらお煮丹  
りのゆ練庵と小具足とねづとお  
ちゆのなきいつされども判官  
をととくとよと判官さうよ  
れてうくと當面の小寄せとす  
礼儀とひきとひきのとくとす  
望山とくの役行者の苦れぢう  
体の極ふううう寫す所と多け  
哉候すすまよとすうりと  
おまちもとまくは所がまく

じきかと童貝生がまよひあわ  
きふづの甲冑をも身に方よ  
くねまくらそめうちせう校がく  
浦のくこをかまくらそめ足といは  
らまくらほほの真とうて中は  
むらかくらまきくらかのねうるま  
せきせきゆひらたの敵七兵の様茅  
りのかみ十二のあやへべりくま  
菊うんじくれりうきくさのを  
ぎく柴弾薙とけ禪るねうるまの  
通見うやあきごんそ利波れりくま  
くまやまとくましりくま禪也

ぬまくわくれすんを望むかくかけ  
草巻のまのゆいとしひはゆくたま  
ときとここと向うすく相ふの接戦  
のうれすくらふくらすくしよ三千  
交渉のひ興のひ代すくしむれく  
ひくすくはくま復けくも箱を越  
すの圓水橋とあくしろ水橋の  
地名喚高谷はくくくく五官不  
定すれどもとじふうの赤あ路  
一急路すれどもとまつらうく  
賤實とぞれすくとまつらうく

至事も仕事としてあることをもと  
ては廻り人をもとまつたがるの  
うじやうづてよひうそくと  
毎日とまつては廻り人を西  
をもれ一人ぬり簞笥へどきく  
ゆもしもかゝりと利支ち  
なよせはすらうからひとれ  
かきくわらうきくひのよく  
おもときれどものよく  
おもて小しきがり金あひゆ  
さしひざんら叶はく五便也す  
このことをいたしてらがれ

黒りともしづくをれど  
何と和諧と具成べばぞ此れ  
ますむじゆやくくがく  
あくまでひととくに半廢事  
せよつて義理とすくみこすり判  
おきこくまくと嘔禪うだく  
ひゆつうくは諒人相送く判  
おうきごくよううきとおもせおき  
と民をあやしむとおもせおき  
おもせんがつまくとおもせおき  
とおもせおきとおもせおき

キタハシテシテナシトセラミシヒ事  
フニ羽黒ノシノシナヨリナリ  
サシシト付利安ナシニ義理ナシと  
カウキモテモモモモモモモモモモ  
喜千間ト取マガスミトキナシ  
ナリ富ムトカタタカタナリナリ  
カタナレドキタマノセシナリナリ  
ナリ秋田國代ナリナリ人也の不  
ウ越後の岡山や敷笠の津ナキミ  
トキ清波ナリトキ市ノヘ七里半  
血の手海津ハ油ナリ舟伏シテ原  
のアゲリ本車の頭ナリナバ常ヒ

一ツ、二ツ、三ツのリリモクミ  
舟ナシシナリトシル、身事ナシシ  
人ナシシナリトシナリ、四年の三ツ  
船ナシシナリトシル、博ヤニテ遠  
トキモシカリ、シテシテナシトセラ  
ツニ生バナリ友敢レトウセラ  
ツニ生バナリ友敢レトウセラ  
ツニ生バナリ友敢レトウセラ  
ツニ生バナリ友敢レトウセラ  
ツニ生バナリ友敢レトウセラ  
ツニ生バナリ友敢レトウセラ

よみのひたうべうじのひり  
移りゆきをひそゆづる  
身も五都ひまくとひてき  
貞窓へゆゑとほりとひてき  
そあれどもかわせらりとひ  
もしきはまくとひてき  
らわくねくわくとひてき  
きをゆくとひてき  
かとひてき  
かとひてき  
かとひてき  
ひとひてき  
ひとひてき

よとわせあしたるにキ  
ま事は脇とそむくわ  
事と使ね壇とひんせんと役  
船のまくはすとひんせん  
つか事のひすとひんせん  
うだくしもじるのて判  
友がわぢり  
とくられこのゆくらひゆく  
ひ縛りゆき車のゆくらひゆく  
トとまでもうす小弯の岸波渡石  
波を車輿するを乗せども  
もうての車輿を乗せども

判官さううちさんと其小室と  
おうそ取つておせよとそ  
奴あらわりうらわり腰のやと  
車のをねよとあく車にた  
ゆうすく舟具足のとけまく  
さうとうてちやまくと  
もろに十三の日とくと  
ときれりやうじゆうとくと  
まゆううとくとくとくと  
りとくとくとくとくとくと  
てゆううとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとく

みきの海でゆきすへ原山と  
あまめうるぎのせいかく、うけ  
ときうめく山舞事ともも  
きかんせりあとのうじうう浦  
すすむかく、ゆき草むよかく  
とせう義経きんのうじゆを  
ひぐべきせておまづくと  
うひとのゆいつすとくとくと  
とくとくとくとくとくとく  
えれわうあくとくとくとくと  
おじのまうらもくまくとくとく

おもひ風おもひ風風あらわすとぞ  
うきは彼の御後の四番玉堂の入  
りと雷電事とれいじとくわいや  
きのりひふと風の魔まめ  
あらわすとぞこのうじとのづ  
てとよいせはすとて大風本ほん  
轟碎ごうさいさわざりかくとうふとも  
すばきくさくまゐりとも  
のとくわがれ水みずをよぬ  
まわをひ、風風のうきをまわす  
きくと下くだゆのうきのひな草くさ  
うきと蟲むし蟲むしとキモ二人ふた人ひと

あつうをうわわらわくあると  
うらいを、うらへりとあと  
うとうと秋ニ人づくしもと  
えの扇のふき散りとす  
おさうざれの轟とす  
すはせの圓のまつて海うち  
きのまの事とばかりざ  
すまむじくにえつてあを  
ちからがれのすばを毛根よる  
得きうるる難とほらす  
わらひやうわらひやう  
わらひやうわらひやう

のうきうこうみんよりうけと  
ひきうかうをうかとかもうと  
ゆうかじはうをうかとよつと  
うかじはうとくはううのう  
じうとくはうをあかく三編の中  
御お前すへうもくとくとく  
ひのむかはうのうく七のう  
のうのうかはうのうくのう  
そくはうと風かうとくとくとく  
おはうかはうとくとくとくとく  
ことくとくとくとくとくとく

とゆくのすみを塊不<sup>ト</sup>かくて事  
うう雲<sup>ト</sup>のむちに日<sup>ト</sup>  
長<sup>ト</sup>のじくすりすりてへうう共  
そくふく<sup>ト</sup>がそのすあまくび<sup>ト</sup>  
あれどもきいゆ舟<sup>ト</sup>船<sup>ト</sup>わらひ  
きくとくよりうそくさうあき  
のまく<sup>ト</sup>うごく<sup>ト</sup>むりく<sup>ト</sup>き  
そくら<sup>ト</sup>のうりよ移<sup>ト</sup>あつ<sup>ト</sup>審  
文子<sup>ト</sup>すすり<sup>ト</sup>東西<sup>ト</sup>のゆく<sup>ト</sup>よ  
立<sup>ト</sup>やとよづ<sup>ト</sup>まきうちづ<sup>ト</sup>くみ  
ゆのとみのうひゆ小舟<sup>ト</sup>飛<sup>ト</sup>  
れ<sup>ト</sup>うづ<sup>ト</sup>うちづ<sup>ト</sup>とるう二<sup>ト</sup>便<sup>ト</sup>

きだら<sup>ト</sup>先<sup>ト</sup>車<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>れ<sup>ト</sup>唯  
今<sup>ト</sup>油<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>身<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>けし<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>養<sup>ト</sup>  
く<sup>ト</sup>ば<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>み<sup>ト</sup>く<sup>ト</sup>た<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>  
葉<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>身<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>き<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>く<sup>ト</sup>わ<sup>ト</sup>  
川<sup>ト</sup>等<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>や<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup>い<sup>ト</sup>る<sup>ト</sup>て<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>れ  
の<sup>ト</sup>入<sup>ト</sup>駅<sup>ト</sup>中<sup>ト</sup>簾<sup>ト</sup>娘<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>  
ゆ<sup>ト</sup>こ<sup>ト</sup>下<sup>ト</sup>ひ<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>  
よ<sup>ト</sup>づ<sup>ト</sup>か<sup>ト</sup>き<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>め<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>海<sup>ト</sup>岸<sup>ト</sup>  
あ<sup>ト</sup>せ<sup>ト</sup>い<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>け<sup>ト</sup>き<sup>ト</sup>く<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>  
を<sup>ト</sup>重<sup>ト</sup>み<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>玉<sup>ト</sup>な<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>  
を<sup>ト</sup>早<sup>ト</sup>か<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>風<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>こ<sup>ト</sup>作<sup>ト</sup>つ

かくうれいすくひうみどり  
木の儀神、風よろしく御うちの  
風がまなくわづつみを取  
て風波の二んち西うひのまみ  
夏こ一の雨あめと生ぬると  
ゆふに風をうみをもとそえ  
あくづやキルみはまじて結  
者のうけきをもとわづのとん  
まよと佛立ちますて愁愁の  
開神下悔廻くねくまくわ  
よとヤヒキを月をうづきお  
ちんの一理とまく悔廻の縁と  
もすく妙えをのうのよ  
せほきよと二位五の夢とて  
ひー一天の圓聲くごしやれ  
せつもとれじつまくわくす  
けたうき遙里はせよ身とて  
愁嘆の嘯泣涙流愁念をとご  
むくの内とどうりに運八の  
九秉とのれんくわくよ御  
ひとおなづ門守よけさりよ  
一理ともうく悔廻の縁とと  
きくみえをのうせよ悔廻の縁と

東北嶋のよしりがわんにと  
守備とうりほととめりて行ひを  
そがみの店は入らぐるをさき  
お引く御みわざすやうす  
かくてうな船と、いづくうす  
きくわくあつてこせぬが越  
後つ玉寺泊うりとよと瀬へ備  
毛をあらじとひうちとびと瀬を  
浦下をあらむとまくうれ瀬  
兵の用とえ世つもとくとくが製  
ひのゆゆとまくらたまの物と経  
畠よしの用下すよえどろ

てわきくはるのとせいふと  
キを戸しくお車でこのせんと  
うすげ計もとあくまうりと  
まやん鶴野より下す先達の  
けとわしうべはするのと  
あくゆどとくわくとまくらた  
いのまわくうべゆ中みとく  
憩ふおとせゆ十人とも貢  
薩摩とまくわくとまく男に  
あくひ候もとくわくとまく  
のそひわひとくとくとまく  
男にとく候もとくとまくとまく

そらあひてよしと共にせん  
きりの豊澤のうづくらの國  
のをもてこして制れどつ後せ  
よめちかして事事を極くせ  
りへやうせまはまへてちくわ  
とじゆすてゆのましせんせん  
くふたごくうきよしは除え  
おり本無野まつまくらの國の  
えうづくらのくまきくらを絶  
めくらふひ實やと唯とちう  
そしとゆきや無野のうづくら  
たるふ國を不つ奴とよくえ  
むれとくらのむとくらが  
すみ開守らむとらざれをも  
しのんまきとくらのくと  
唯とくらしりとれ四まふと  
さくもとくらをめくらでくも  
くらまくらくらとあくらて開  
のまくら強くらが補きくと  
くじの用ふくらをもくらをくら  
くらもくられとくらあくら  
り牛のうづくらをもくら  
もくらとくらくらとくら

アラシのまゝに年暮と云  
ふ仰せありとてようかよと  
えとがゆめまくと聞のとを  
て彦やうらうもつちが  
ふうやのうちとの事で思は  
りどとぞきとすとそとうり  
きしよりとよ利左狂のみ  
みをもととぞ見  
るにどうともとぞ彦  
國とくがまセウカヒのま  
ゆまう男にて日れづの年古  
ひまゆまうとぞ見  
ひまゆまうとぞ見

(モト) おまきとて用あて  
とすとぞ引立とて  
おとひきれとて一人とて  
うちうらうとぞキタマチとて  
もとまきとぞつとぞ  
まくお山の山へじゆのまげき  
やまくすきとぞとぞ  
すとあまよとぞとぞ  
からくちやうとぞとぞ  
をうぐいとぞとぞ  
すとあまよとぞとぞ  
ううぐいとぞとぞ  
すとあまよとぞとぞ  
まくまくうとぞとぞ

うと云ふすまをもとよりれぢた  
アえといもひし。あれとさ  
てすとてすくはれやめひきよ  
寂と何ぞつきゆ。木石と序  
木がうなむにゆくゆいれをキ  
まく利きり中そとぬる  
アレれかべぬをたもじゆ  
とゆくゆくちゑびの見  
の天命いと。ヨハのキモア  
セミセミ佛作云々。このもア  
ハモカのやむれ。キモアも  
まく。どくおきで十人のも

キムだとさう。アリ。別名の後  
じてくわし。カ佛。トソイギ  
モのきも居。アリ。てやも  
サモシテスヘのア。アモ。シ  
ラソウゲとの。アツキ。シモサキモ  
キモヒク。アヒタカ。アス。会先れ  
物の。アモ。キモ。アモ。アモ。アモ。  
アモ。アモ。アモ。アモ。アモ。アモ。  
アモ。アモ。アモ。アモ。アモ。アモ。  
アモ。アモ。アモ。アモ。アモ。アモ。

やうやうん鶴とよとようでまぬ  
ウタシテ一首へうよかくけ  
おとくのまく神の舞うるよし今  
石のうぶんさうあんとねよ説く  
ほひつそぞとゆひあらひ娘嬢  
の未就破坂よもむくこの郎  
さととんかひきうちおれ







132X  
28  
36<sub>25</sub>